

家族造形法の深度

家族造形法を使った事例検討

その5

早樫 一男

○はじめに…。

繰り返しになりますが、家族造形法を使った事例検討の面白さは、ライブ感覚で、臨場感あふれた展開となることです。面接にも通じる感覚といってよいと思います。

ライブの様子を紙面で再現し、伝えるのはなかなか難しいのですが、今回もある研究会での展開を報告することにします。

今回の事例検討の後半では、援助者の位置どりについて、体験的（体感的）な理解をすることになりました。

○家族情報と相談に至る経過…。

家族は父母（いずれも40代）、長男（中2）、長女（小4）です。父親は単身赴任ですが、自宅には週末ごとに帰っています。母親は福祉関係の仕事に就き、夜の8時過ぎに帰宅することが多いとのこと。長女（以下、本人）は勉強ができないので、夜中の1～2時ころまで勉強をしていま

す。母親が買ってきたドリルをしなければいけないとのこと。長男はマイペースです。

相談は学校の先生から持ち込まれました。「いったいこの家族ってどんなの？」ということを考えてみるのができたらなあというのが事例提出者（以下、提出者）の思いです。

○家族造形を通して、家族の理解…。

提出者が家族役割を決めることからスタートです。役割が決まったら、提出者が彫刻家役になり、できるだけゆっくり、家族を作っていきます。

まずは、本人を置くことから始めました。

本人はお勉強をしているポーズです。少しくつむいています。「一切笑わず、表情は暗い」という指示が加わりました。

次は兄です。本人からは背を向けて座り、一人でゲームをしている感じです。

その次は母親。娘をじっと見えています。関心は外にあるかもしれないということで、からだの向きをどのようにするか、提出者は悩みながら、ポーズや向きを作りました。

父親は隅っこで外を向き、あぐらを組んでいます。「家のことについては、少しは見ている感じ」というコメントが付け足されました。



(写真 1 座っているのは父親役 立っているのは母親役)

○静止の時間…。

4人家族が作られた後、全体を俯瞰して、それぞれのポーズについての微修正が行われました。

完成後の1～2分程度は静止の時間となります（「どのような感じが湧いてくるか、どんな気持ちになるか等、じっくりと確かめてください」と指示があります）。

また、この静止の時間中、提出者はいろ

いろな角度から眺めたり、それぞれの横に位置し、共に感じてみることを繰り返していきます。

○家族からのフィードバックと意見交換。

家族役割を引き受けた各メンバーからのコメントと意見交換は家族の理解につながる大切な時間となります。家族造形法ならではの事例検討の時間と言えるでしょう。

今回も提出者を交えた意見交換が活発にされました。以下、そのやりとりの再現です。

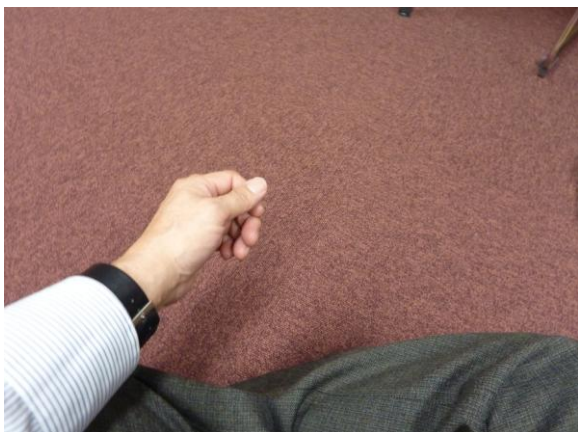
本人：苦しい。本当に苦しかった。息ができない。勉強をやめたらお母さんの足がつかつかとよってきそうだから、やめられない。しんどい。苦しい、この姿勢。本当に限界。



(写真2 本人役 右上にかすかに母役の足が見える 中央上は彫刻家役)

兄：まったくマイペース。家族のことをあてにしていない。自分から関わりを持つという感じはない。誰も見えないし、あてにしていない。さみしいという感じはない。あきらめているわけではないが…。時々、飽きた時に、お母さんが怒っ

ている姿勢が見えたり、気配を感じると、また、お母さんは妹に対してやっているなあと思う。でも、いつもの感じやなあということで、距離を置いている。



(写真3 兄役 ゲームをやっているところ)

提出者：妹に対してはどんな感じ？

兄：特に、気持ちは湧いてこない。妹は見えないから、しんどいという声を聞いても、そうやったのかという感想しか浮かんでこない。

父親：娘は見えない。しかし、お母さんの足の向こうに娘の手は見える。娘はしんどいやろうなあとは思っている。お母さんがしっかりと立っていて、足の存在がすごく強烈なイメージがあり、気になる。足が怖い。息子は単にいなあという感じ。

本人：お父さんは気にしてくれているんや。
(父の言葉は意外という感想が語られました)

母親：いろんな気持ちの変化がある。すごく動いた。最初、指を指しているというポーズは、手がしんどくなるという感じと気持ちいい感じがした。自分がこの家を仕切っているというか…、支配という感じ。でも、静止の時間が経つにつれし

んどくなってきた。最初は、子ども二人を目の端で見張るような感じだったけれど、最後の方は姿勢を維持するので精いっぱい。とにかく、しんどかった。自分のしんどさで気持ちは動かないが、子どもから声があがるとか、動きがあったら、カッとなって、しんどさが怒りに転じるような感じがある。父親は見えていない、気配しか感じない。でも父親の声が聞こえたり、動きがあると反応しそう。「何もしない癖に何言っているの！」とか、「もっと父親が頑張ったら」とか、「もっとしてよ！」といった感じでの怒りがある。まったく、見えないのに意識はしている。兄のコメントを聞いても心は動かなかった。娘がしんどいといった時にはイラッとする。娘の反応は刺激となる。みんなから、お母さんは怖い怖いといわれているときに意外だった。そんなに怖いって？という感じ。

提出者：客観的に見ていると、お母さんが怖いって印象が強烈にある。自分で母親のポーズを作ったが、そのポーズが焼き付いて、どの家族メンバーの位置に行っても、お母さんは視野には入らないのだけれど、母親のポーズをずっと感じてしまっている。お母さんがとにかく怖くて…。

本人：私はお母さんの全てが見えないのだけれど、足が十分に怖かった。

提出者：私は残像のように残っている。自分が作っているかもしれないが、どこにいても焼き付いている、離れない。

兄：僕は後ろを向きたくなかった。その一方で、僕のことをお母さんはどのように思っているのかは聞きたかった。僕の存

在について…。

母親：お兄ちゃんに対しては、変なことをしなければいいという感じ。でも、反抗期に入るし、口答えしたりしたらすごく反応すると思う。

提出者：兄としては、今は妹に目が行っているから、お母さんに対しては、あたりさわらずで、自分の世界を守るという感じではないかなあ。

兄：とりあえず、お母さんはどうでもいいはという感じ。お母さんとは適当に離れておこうというか…、向きたくないなあという感じがある。

本人：誰もあてにできない感じがあるから、誰か助けて！という思いが湧いても、誰もここにはない感じ。

父親：子どものことは気にはなるけれど…。

本人：途中で、横に倒れなくなった。窒息しそうで…。

○母親への対応は？…。

提出者：お母さんはどういう名目なら、学校（スクールカウンセラー）に相談に行けるだろうか？

母親：警戒心はすごく強い。しかし、警戒心がとけて来たら、すごく頼ると思う。

進行役：お母さんは誰か（援助者）が自分の近くに来るということは受け入れることができるか？

母親：最初は警戒心が強いと思うが…。求めている気持ちはすごくあると思う。

提出者：お母さんはどういう名目だったら援助者とつながれるだろうか？子どもに問題があると言ったら、子どもにすべて裏目に出てしまう。お母さんに問題があるから相談をというわけにはいかないし

…。

母親：先生から「学校で心配なことがある。

お母さんにも聞きたい」と働きかけられたらどうだろうかと自問してみると…。

提出者：先生からお母さんに声をかけてもらうことはできるが、子どもの状況がスムーズにっていないということは伝えざるをえない。

進行役：もしも、学校から「家でのお子さんの様子を聞きたい」と言われたらどうだろうか？

母親：娘に、「何をしたの？」って聞かざるう。

提出者：もしも、カウンセラーにつなげることができても、母親はほとんど心を開かないような気もする。

母親：自分からは行こうとは思わない。単発とか、2～3回ぐらいだけ会っても心を開きそうではない。でも、継続的に会ってもらいたい感じはある。誰かが近くに来てくれて、ちやほやちやほやしてくれたら…。べったりと頼りたい。

○娘が元気になるには…

父親：学校から来て貰いたいと言われたら、行ってみようというつもりはある。

母親：私はうれしくない。特に、父親一人で出かけたら…。

父親：気になるから週末には帰っている。子どもに対しての気持ちはある。しかし、妻の足が気になる…。自分がいないところでお母さんがやっていることについて、信頼とまでは言えないが、尊重はしている。

進行役：両親で学校に呼ばれたら…。

母親：学校から帰ったら、学校ではこうい

う顔をするのと父親を攻撃しそう。

父親：学校から呼んでくれるのなら、行ける。

提出者：それでは、この子が元気になったらどうか？

母親：楽になる感じがある。

本人：この姿勢をやめさせてくれないかなあ。

母親：それがまた腹が立つ。「しんきくさい！」という感じ。自分と重なる感じがある。

提出者：そうだと思う。

母親：しんきくさいのを見ていると、すごくイライラする。

父親：娘とお母さんとの間での悪循環を感じる。

母：例えば、学校から「子どもを早く寝かせてください」と言われたら、どのように反応するかを考えている。自分の気持ちの動きが予測できない。「提出物が出ていない」といわれると、カッとなる。すごく腹が立つが、「早く寝させて」と言われるとわからなくなる。悪い反応は出てこないと思う。

進行役：夜の時間の過ごし方を聞かれたらどうか？

母親：何時ころ寝ているかと聞かれたら、責められている感じがする。子どもが元気になったら、お母さんとしては安心する。とにかく、子どもを見ているとイライラする。

提出者：救いは友達との関係には問題がないこと。それなりに楽しくやっているよう。

母親：そういうことを言われると母親とし

てはうれしいかもしれない。「学校で友達とうまくやっている」と言われるとうれしい。娘のことを褒められると、心の底のあたたかいところが動く感じがする。それを聞くとポーズが緩む。

父親：娘に対しては、気になるが手をのばせない間隔がある。

娘：父親からはそんな感じは伝わってこない。

提出者：でも父が帰って来ている。

父親：とにかく気になる。兄に対しては、そのままおとなしくしてくれよという感じ。

母親：母親は実はすごく疲れていると思う。仕事はちゃんとしているかもしれないが、乖離していると思う。

進行役：母親は子どもに対して褒めることができないか？

母親：だって、しんきくさいもの…。イライラする元だもの。でも、褒めてもらうと心の底が温かくなる。お母さんを褒めるより、娘のことを褒められる方が温かくなる。実は、娘と一心同体という感じ、分身というか…。

提出者：改めて、確かめるが、担任と新しい関係、いい関係を作ってもらうことは…。

母親：このお母さんと継続的にカウンセリングしていく、サポートしていく覚悟がよっぽどしっかりしていかないと…。

提出者：学校として、そこまでの覚悟は体制的にも無理だと思う。お母さんが自主的にどこか相談機関に通うとも思えない（母親「通わないと思う」とつぶやく）。少なくとも、お母さんとコミュニケーション

ョンをとれるようにして、この子の力をつけていく方向を考えざるをえない。お父さんには、このような状況の中で大変だから、助けてもらえませんかねといったふうに持っていったらいいね。

母親：娘が思春期に入ったら、母娘の関係は大変だと思うけれど、小学校時代に少し明るくなって、元気になって、学校で褒められたら、大丈夫な気がする。

本人：これ以外のポーズでおいて欲しい。

提出者：この子に対しては、学校のサポートが少しでてきている。サポートが増えたことで、どのようなポーズになれるかだよね。

進行役：それをやってみたら…

提出者：今は、この子のことを保健室が把握して、保健の先生が声をかけてくれるようになった。この子はしんどい時は、保健室に行くようになった。また、いつも先生から怒られてきたのが、少し減ってきている。何か背景がありそうだとわかって、先生が配慮してきている。気にかけて、この子に声かけしてくれている先生もいる。それだけでも、この子にとってはだいぶ違うと思う。これから、この姿勢がどんなふうに替わるかやね。

進行役：具体的に先生役にどこかに入ってもらうかを考えてみよう。そのことによって、ポーズが変わるかどうかだが…。

この後、援助者の位置（関わり方を具体的に位置関係で表してみる）を確かめてみることにしました。

今後の関わりについて、造形という形で

確かめてみるという展開は、造形法の使い方（バリエーション）の一つです。

家族造形法の面白いのは、その場で浮かんだアイデアを実際にやってみることができるということです。

○援助者の位置は…。

最初のポーズの確認後、提出者が援助者役になり、「どこに、どのような姿勢で入るか」を試行錯誤して確かめてみました。

提出者：難しいなあ（思案する）…。

本人に関わる位置をいくつか確認しながら、その都度、援助者・本人・母親の感じを言語化していきました。

提出者：どこに入っても、お母さんかららまれている



(写真4 立っているのは母親役 下を向いているのは本人役 位置を確かめている援助者役：左端)

母親：その位置はますますいやだ。

本人：どうしても動けない。

提出者：お母さんからみたらじゃまだよね。



(写真5 母親役から見た娘役と援助者役)

提出者：どっちから支えても、お母さんとは対立するね。

母親：学校で本人を支えるというのがいいのかもしれない。

提出者：お母さんにとっては見えないところがいいのかもしれない（他のメンバーも同意）。どこに入っても、お母さんの味方をしているというふうにはならないし、対立関係になってしまう。

母親：学校の先生が耳元で「頑張ってますよ」「友達とこんなふうにしてますよ」と言ってくれれば受け入れられる気がする。

その後も、母娘が少しでも楽になる位置関係、ポーズの確認を繰り返しました。

提出者：当面、学校でサポートして、この子がしっかりしてきた頃に母親と会う場を設定するとかやね。

母親：そうだったらスムーズに受け入れられるかもしれない。

本人：援助者が横に来てくれると、神様みたい…。

提出者：この子にとっては、保健室で話をして、なんとなく楽になったことによって、希望を持ったのではないか…。

母親：登校というのは、お母さんの視界から消えてしまうようなイメージがある。帰ってきた時に、娘が元気になって、顔が上がっていたら、「あれっ、どうしたの？」という感じがある。その頃に、「最近、学校ではこうなんですよ」と言われたら、納得する。

本人：少し元気が出て、顔が上がった時には、お母さんの足がそんなに怖くない。



(写真6 顔を上げた娘役 手は援助者役 足は母親役)

その後、提出者からは学校の取り組み、今後の可能性についての話が展開されました。

○事例提出者の感想

本人であれ、親であれ、自主的に相談に来ないようなケースのなかに、「まったく信じられない」「どういうことだろう!？」

と戸惑うものがあります。そんなとき、家族造形を置き、登場人物たちの声を聴くことで（文字通りの声もあれば、身体から感じられる声なき声もあります）、当事者中心の状況把握が可能になります。もちろん、本当の当事者の声ではありませんが、それでも、私たちのイメージーションを活性化し、理解を深めてくれます。家族造形の優れたところは、登場人物のすべてが平等に声を上げ、それぞれの立場に寄り添った理解と支援計画が可能になることです。もちろん、最終的には、IPの利益が最優先されなければなりません。一見、悪者のように思える人にも理解と共感がなければ、家族を動かすことはできないのだと思います。

○おわりに…。

家族役は、役割を引き受け、造形として感じ、演じる中から湧き出てくる思い（内なる声）とともに、役割から離れたところで感じる思い（外からの声）を行き来するというのが、家族造形法を通した事例検討の特徴の一つだと感じています。

今回も協力していただいた参加者のみなさんに改めて感謝いたします。